慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	C・ウイルソン 重商主義 : 解釈の変遷
Sub Title	Charles Wilson, 'Mercantilism' : some vicissitudes of an idea
Author	渡邊, 國廣
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.2 (1960. 2) ,p.201(83)- 205(87)
JaLC DOI	10.14991/001.19600201-0083
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600201-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ピデス、ソフォクレスの四人があげられるけれども、ソフォクレスが欠けるだけで他の三人の順序はエラスムスにあっても同じである。第五に歴史家がくる。トゥキュディデス、ヘロドトス、ヘロディアス。エラスムスはヘロディアスを省いている。第六に科学者、ヒッポクラテスとガレノス。モアは自然科学、とりわけ医学を重視したが、Bude の寄せた「ユトゥピア」の序文で分る通り友人 Linacre がガレノスを翻訳したこともこのリストに反映しているかも知れない。一方エラスムスが推していながらモアの表に名前の見えないのがデモステネスである。前記のエラスムスの著作の中、三冊までがデモステネスをあげている。そのほかにはアエソポス、クセノホン、プトレマイオス等が認められる。尚イギリスのヒューマニスト Elyot の計画案は、六人の中四人がモアのリストと一致して、十四歳以前にルキアノス、ホメロスを学び十四歳以後プラトン、アリストテレスを推奨するが、それ以外にデモステネスとアエソポスを挙げている。すでに見たようにヒュトロデウスの携えたのはギリシャ文献のみである。それは十六世紀初頭のイギリスがギリシャ古典研究をめぐってその価値と必要が激しく議論されたことを意味する。モアのリストはヒューマニストの闘いの重要文書であった。

Ⅳ

ユトゥピア人は真実の快楽を教育と学問に学んだのであるが、彼等は最高の学問をギリシャ古典にみた。しかもギリシャ古典中第一等の地位を占めるプラトンの共産主義は、ユトゥピアの共産主義の基礎をなすものであった。二つの共産主義は、一方が貴族的であるのに対し他方が民主的で階級のない社会という相違はあるにせよ、プラトンが原形であることに変りはない。ユトゥピア人の快楽主義は又、その共産主義と深く関係している。共産主義こそは最大の快楽を得、最小の苦悩にとどめる最善の道と考えられるからである。

モアの共産主義論を理解するには、その思想史的背景から知るべきである。一方にプラトンに始まるギリシャ古代の源泉があり、他方、原始キリスト教の根柢がある。プラトンの共有制はアリストテレスによる反論を生み、原始キリスト教は中世カトリック教会によって遂に実定法を根拠にしてではあるが私有制を認めるまでに改変された。ルネサンスのヒューマニストはこのような歴史のなかで、プラトンや原始キリスト教を復活して、共産主義論を唱えた。この風潮の中でモアの「ユトゥピア」はその際立った主張の典型であった。しかしヒューマニストは共産主義実現の具体案は何一つもちあわせなかった。彼等にとってそれは理想像ではあっても、現実に実行しうるものとまでは考えられなかったであろう。モアにとって「ユトゥピア」の共産主義を内から支えている倫理的世界観が、何ものにもまして本質的なものであった。

Ⅴ

本書の特色は「ユトゥピア」の中の難解な一章を、同時代の文献だけでなく古代の文献にもさかのぼり、豊かな資料を駆使して文学史的な流れの中に位置づけることによって、その意義を解明するにある。その限りにおいて本書は立派な成果を収めている。本書を批判するよりはむしろこのような周到な研究が「ユトゥピア」の全面にわたって進められることを先ず望むものであるが、文学史的方法という枠をこえてそれらの文献を生みだした社会との繋りへの究明に全くふみだそうとしないのは甚だしく物足りない。例えば共産主義論にしても、肝心な社会経済との関係を無視して文献史的な範囲で論じるのでは、その結論がいずれにせよ、単なる抽象論の域を出ない。モア自身、現実社会を批判の対象として構想したことを考えれば、結局非常に一面的な考察よりの結論というほかはない。又、文学史的な研究として位置づけるだけでなく、モア自身の精神史的な位置づけがなされるべきであろう。むしろモアの思想がここでは静的に平板に定着された印象をぬぐい難い。「ユトゥピア」を境にモアの思想には宗教改革を契機とした変化が生じなかっただろうか。ティンダルとの論争の時代と「ユトゥピア」の時代とを同日に論ずることに疑問を覚える。社会経済史的背景の中に、モアの思想発展史の一環として捉えるなら、本書の成果は、実に有効な形で再構成されるのではなかろうか。――一九五九・一二・六――

（渡辺和一郎）

書評及び紹介

C・ウイルソン『重商主義――解釈の変遷――』

Charles Wilson, 'Mercantilism': Some Vicissitudes of an Idea. Economic History Review, Second Series, Vol. X, No. 2, 1957, pp. 181-186.

一

十七世紀初頭から十八世紀中葉にいたるまで、ヨーロッパ諸国において支配的な経済政策の基調は重商主義であった。その本質については、時代と場所を異にするに従い、これまでいろいろ解釈がおこなわれて来た。しかしそれによって重商主義の真に何たるかが明瞭にできたとは思えない。

最近の成果にまつまでもなく、すべての重商主義者に共通な点といえば、次の四点であろう。一、富は本質的に力である。二、力は本質的に富である。三、富と力は政治の最終目的である。四、軍事上の安全から経済上の犠牲が要求されることがよくあるかもしれない。しかし富と力は両立する。重商主義の本質をつくものとして、まったく正鵠を得ており、全面的に納得できる。従って重商主義の何たるかをいう際に考慮すべきは、これら諸点である。しかしこれまでの解釈では、それら諸点のうちどれか一つをもって全体を説明しようとするにとどまった。複雑な現象の一側面だけをみて、概念

規定がなされて来たのである。いわば一元論的な解釈でしかなかった。その推移はどうか。

ここで取上げた小論では、かかる問題意識に立って、スミス、シュモラー、カニンガム、ヘクシャーの重商主義論が紹介されている。これら諸論者は、それぞれの生きた時代の要求から独自の議論を展開した。同じ対象を取上げ、解釈がそれぞれ違い、共通点すらない。時代の推移と共に新しい見解が生れるとすれば、重商主義をめぐる解釈もまたその例外ではなかったわけである。しかしどの解釈も、時代の要求にこたえるべくあまりに急で、重商主義の真に何たるかを規定することができなかった。その極端な場合には、本質を見誤っている。著者はそう断定した。実際にどうか。

二

重商主義という言葉が一般に用いられるようになったのは、スミスが国富論においてその意義を認めてからであった。スミスによれば、国を富ますには、二つの違った経済上の主義があった。一つは商業主義といい、他の一つは農業主義であった。

これで明瞭な如く、スミスの体系においては、経済的動機が出発点にすえられていた。国を富ますということが彼においてはすべてであり、その目的に資する限りでの農業主義・商業主義であったのである。国を強くしようという思想をスミスはそこにみない。そして商業主義がかかるものとして発動する初期においては、スミスによれば、富と貨幣が混同され、日常の用語上、いずれの点においても同様のものとみなされた。かくて金銀の輸出禁止が叫ばれるにいたるわけである。しかし後にこの立場は、貿易上の差額に適当な注意を払うことにかわった。かくて輸出を奨励し、或る種の輸入を阻止するための体制が確立された。そしてこれをイギリスが最初に完成し、他のあらゆる商業国により模倣された。重商主義の起源と展開が、スミスにおいては、かく概観された。国を富ますため商業主義に依存するとすれば、貿易上の収支いかんがもっぱら問題であり、そこに一国繁栄の尺度を求めようとしたのが重商主義であった。スミスは重商主義をそのようなものとみた。国を富ます手段としてだけ考え、国を強くしようという面のあることを忘れた解釈といわなければならない。

ところで国が富むということを、スミスはどう理解しようとしたか。重商主義者の説く如く、貿易上の差額を有利に実現するため保護主義に訴え、かかる手段により達成できる経済上の繁栄をもって国が富んだとみていいのか。スミスによれば、それは重大な誤謬を犯すものであった。保護主義に依存しようとすることを、スミスは、商人や親方製造業者の陰謀とみた。しかもかかる陰謀が、実にスミスによれば、消費者や小規模な織布親方の犠牲のうえになされようとしているところに問題があった。従ってそこで考えられているのは、全体の利益ではなく、特定の人々の繁栄であった。重商主義により保護され奨励されるのは、金持や有力者の利益のためにおこな

われている製造業であり、ひるがえって、貧しい大衆のためおこなわれる製造業は無視され圧迫されたことに、スミスはどれほど憤慨したことか。もはや一国の繁栄は重商主義に期待できない。国を富ますことから発した商業主義は、特定の階層の利益に奉仕する結果となった。スミスを悲しませたのは、実にこの事態にほかならない。重商主義はその本来の理想から離れて、特定の人々の利益をめざした。その限りスミスにおいて重商主義は破棄さるべきものとなった。

商人や親方製造業者がスミスにおいて排除されなければならないとすれば、その活動が他のものの犠牲において強行される限りであった。そしてその限り、スミスによれば、社会的正義が実現できない。社会の諸階級を平等に扱うというのではなく、或るものの犠牲において他のものの利益を実現しようというわけで、スミスのもっとも恐れるところであった。重商主義の計画者のなかで、商人や親方製造業者は主要な推進力として、スミスによれば、そういった方向を打出し、利益を独占していた。職人の移動すらその自由を妨害され、商人や親方製造業者の利益に供されていた。あらゆる生産は消費を目的としておこなわれず、生産者の利益がすべてに優先した。国を富ますということがスミスにおいてはすべてであった。その目的に沿う限り、商業主義は讃美していい。しかし商人や親方製造業者の利益に奉仕する限り、排除すべき主義となる。スミスにおいて重商主義が排除されたとすれば、それが国を富ますということを忘れて、これら特定の階級に奉仕するようになったためであった。一国の経済的繁栄に誰もが自由に参加できることを保証するものである限り、商業主義は国を富ますという本来の目的を達成することができるのである。スミスはそう考えた。

三

かかる解釈にかわって、十九世紀の八十年代には、重商主義をもって、もっぱら国の統一を果すための理論とみる見解が起った。いわゆるシュモラーの解釈である。ドイツの経済的な立後れは国の統一を欠くことから来たのではないか。とすれば、統一形成のための理論をどこに見出すべきか。重商主義はそのための理論を提供しないか。シュモラーの解釈は、かかる実践的課題にこたえるべく打出された。国を強くするためどうするか。シュモラーが重商主義に学ぼうとしたのは実にこの点であった。

重商主義の真随は、シュモラーによれば、国家建設にあった。しかし単に国家建設ではない。シュモラーが国家建設という場合、同時に国民経済の建設を想定してのことであった。シュモラーによれば、政治の統一ができれば、自動的に経済が繁栄する。近世的国家を建設する高い意義もまたそこにあった。国の統一を完成し、経済の立後れを一挙に克服する理論を、シュモラーは重商主義に見出していた。従ってスミスと違い、それは、後進国ドイツに統一を与える理論として、かなり重要視さるべきものであった。

国が富むためには、強力な政府を持たなければならない。それを欠くことから、ドイツはイギリスに立後れた。そういった認識が、シュモラーにおいて、経済に対する政治の影響力を高く評価する結果を生んだ。しばしば政治は経済を左右した。シュモラーの指摘をまつまでもなく、一六〇〇年から一八〇〇年までの全時代を通じて、数年ないし数十年にわたる長期の戦争が不断におこなわれ、その目的は明白に経済的なものであったが、この抗争においてイギリスが終始有利な立場をまもることができたのは、疑いもなく、強力な政府を持っていたためであった。貿易政策戦において、また富や工業的繁栄の点において、イギリスが優者の地位をかち得たのは、政府が、国民や国家の経済的利益増進のため、その国の艦隊や海軍本部の力、関税法や航海条例の制度を迅速に適確に且つ大胆に用いたからにほかならない。見習うべきはイギリスである。政府は、シュモラーによれば、国民の経済生活に必要な権力の基礎となり、また経済活動に対する刺戟となった。持つべきは強力な政府であり、その指導があってドイツもまた前進を約束される。シュモラーはそう信じ、スミスが国を富ます手段とみた重商主義から、統一国家形成のための理論を引出そうとしたのであった。

十九世紀ドイツの当面の目標は、イギリスに追いつき、できれば引離すことであった。経済発展について分析がなされたのも、つまりは自国をそこまで引上げたいという一念からにほかならない。そしてこの結果として、経済の進歩に対し国家が果す大きな役割が強調されるようになった。経済を指導できるのは、もはや個人ではない。むしろ国家の強力な指導を得て経済は繁栄するのではなかろうか。シュモラーによれば、重商主義はそのことを教えた最高の理論であった。自由放任にかわって国家による指導が重要であり、シュモラーによれば、経済繁栄のための唯一の手段はそこにあったのである。

四

イギリスで経済史の研究が始められたのは、新トーリー派の帝国主義者や保護主義者のための知的兵器庫として役立てんがためであった。従って創始者の一人カニンガムが重商主義をどうみたかは、おのずから明白であろう。

カニンガムによれば、経済史で研究すべき第一のことは、工業を発展させ、商業を伸張しようとする意識的な努力についてにほかならない。しかしこの必死の努力も、カニンガムによれば、国家の機関に結集されるのでなければ一国の進歩に影響を与えるほどの力となり得ない。カニンガムは、重商主義のもとにおいてそのことが見事に達せられたとみた。富に対する欲求は、もともと個々ばらばらに打出される。そしてこれらが、国家の権力により一つの目的にまとめられてはじめて、国を強くすることができる。重商主義は、カニンガムによれば、実にそのことを教えた。下からの盛上りに対して国家が権威をもってのぞみ、一つのまとまった力にまでたかめるという思想に、カニンガムは重商主義の本質をみようとしたのである。

周知の如く、当時イギリスは帝国主義的進出を開始しようとしていた。従ってカニンガムのこの解釈は、時代の要求を十分に満足させるものであった。内に経済力を充実し、外に向って国力を伸張しようという原型は、重商主義時代にみられたところであり、すでにイギリスがかかる仕方で過去において達成した繁栄は、帝国主義者をどれほど自信づけたことか。富は力の条件であるに違いない。しかし富は、政治目的に結集されるのでなければ、力となり得ないことを思わなければならない。従って富がそのまま力とは考えない。富が力となるためには、国家の強力な指導が必要だというのである。かく解釈することによってカニンガムは、重商主義をそのまま帝国主義的発展の理論に転用しようとしたのであった。

スミスは営利目的のための陰謀とみて、重商主義を非難した。シュモラーは富強のための手段とみて、重商主義に賛成した。しかし一方が富といえば、他方は力といい、いずれも一元論的な解釈から脱することができなかった。カニンガムまたしかり。これに対してヘクシャーはどうか。彼においてそれが克服できたか。

ヘクシャーはその大著において、重商主義期には、経済力が国力増進のために集中されたといった。従って彼の重商主義解釈では、国を強くするということに重点がおかれ、国が富むことは従的なものと解されていた。つまり重商主義は何よりも国力充実のための体制とみなされていたわけで、依然として一元論は克服されなかった。

しかもヘクシャーにとってもっと重要な問題は、国力の充実という大目的のまえに、私経済の進出をどうするかにあった。現に重商主義期には、個人の旺盛な経済的活動がみられた。そして徹底した私的利潤の追求で、国の利益が妨害されることしばしばであった。これに対しヘクシャーは、充実した国力が私経済の繁栄にとり必要な補助となるとみ、私経済上の自由が国力の充実に何の障害にもならないと論じた。国力の充実という大目的にもかかわらず、私経済的自由が保証される原型を、ヘクシャーは重商主義のうちに見出そうとしたのであった。計画経済のなかで、自由の問題をどうすべきか。ヘクシャーの生きた時代の関心がそのまま彼の分析視覚となっていたわけである。

（渡邊　國廣）